



小型スズメバチの遺骸(左)とその巣。本来、ハチは人間を襲わない昆虫といわれているが、巣に近づくと攻撃を受ける。特に女王蜂を育てる秋から晩秋にかけては神経質になり、攻撃性が増すという(提供、菅栄一)



ツツガムシ病の原因となるツツガムシの顕微鏡写真(左)とツツガムシに刺された跡(右)。ツツガムシに刺されると、患部は初め赤く腫れるが、じきに水泡、そして潰瘍化し、それから写真のようにかさぶたになる(提供、岩手医科大学皮膚科学講座)

## 山小屋の主人の知恵袋

—生き字引に学ぶ登山術—

スズメバチや毒のある虫に刺された、どうしたらいいか  
肌の露出を避け、ハチが近付いたら静かに逃げる

毎年夏から秋にかけて、スズメバチに刺されて重症になったり、中には死亡したという事故が全国各地で起きている。この時期はスズメバチが一年中で一番活発な時である。最近では山の中だけでなく、住宅地の中でも事故が起き、駆除する人が多忙を極めている。スズメバチが住宅街に巣を作るようになったのは、山の裾野などで宅地開発のためなどに森林が伐採され、棲むところを失い、樹木のある住宅地に移動したためといわれている。

人間が巣に近づくと、スズメバチは人間の回りを飛び回って警戒態勢に入る。さらに近付くと、アゴをカチカチいわせて威嚇する。この威嚇を無視してさらに近づくと、今度は一斉に飛び出してきて、容赦なく刺す。中でも黒い色に反応するらしく髪の毛や黒い服を攻撃してくるといふ。また、風にひらひらするものやセーターなどの純毛製品、さらには香水、ヘアスプレーなども刺激するというから控えたいものだ。被害を少なくするためには夏でも長ズボン、長袖のシャツを着る。また、汗が残らず乾きの早い化学繊維で出来た白系の服がよいという。

もし、スズメバチに遭遇したら、頭を隠して低姿勢でゆっくりその場を離れる。大きな声を出したり、走って逃げ出すと追いかける。また、手やタオルで払うこともやめる。その場

にしゃがんで首を押さえながら飛び去るのを待つ方がスズメバチを刺激しない。

もし、刺されたら患部を清潔な流水でよく洗い流すようにする。痛む時は冷湿布などで冷やすと楽になる。患部を冷やしたまま病院に行き、医師の治療を受ける。昔は毒と中和するのだと聞いておしっこをかけるとよいといわれたが、この方法は不潔なだけでなく、効果は少しもないという。昔の常識は今の非常識といわれるが、その典型である。いざという時のために虫刺さされ用の薬である抗ヒスタミン軟膏をザックに入れておく。ある山小屋の主人はハチに刺されると水で流した後、ウワバミソウの茎を叩いてその汁を塗ったり、スベリヒユの葉をもんで汁を塗ったそうだ。

スズメバチ以外によく山で刺される生物には蚊やブヨがいる。これらは刺されても命には別状ないが、不快なことには変わりない。山に入る前に虫除けスプレーをかけた後、刺されたらすぐにかゆみ止めを塗り、乾いたら塗るということを繰り返すと回復が早い。

あまり名前が知られていないが、手遅れは命取りになる病気もある。それはツツガムシ病と呼ばれる病気である。かつては手紙の冒頭に「つつがなく（ツツガムシに刺されることもなく無事に）お暮らしのことと思います」という具合に日々心配された病気だったが、現代ではあまり話題にならない。今の若い人には聞いたこともない虫ではないだろうか。しかし、スポーツドクターの菅栄一医師によれば、「今でもツツガムシ病はあり、手当が遅れると命取りになります。2、3年に1、2人の死亡例はあり、楽観出来ない」と警告する。この虫の正体はケダニの幼虫。

全部が全部保有している訳ではないが、リケツチアを保有している幼虫が病気を発症させる。北海道と沖縄を除く全国にいる。どちらかというと、高い山より、比較的低い草原などについて四季を通して発症している。刺されると、刺し傷を中心に蚊に刺されたように赤くなり、10日ほどの潜伏期間の後に40度近い熱が出て、頭痛、筋肉痛などの症状になる。それからほぼ全身に淡紅色の斑点が出来る。治療が早ければ、治るが、遅れると手遅れになる可能性がある。菅栄一医師は、「登山口や途中の草むらなどで休む時は素肌を露出しないことが大切。自宅に戻ってからは、1、2週間は体調を観察して欲しい」と注意を呼びかけている。

ツツガムシ病と同じ位知名度が低いのが、問題になっている病気にライム病がある。ツツガムシ病のように死に至ることはないそうだが、頭痛、発熱を起したり、ひいては心臓障害、関節炎を起したりする。これは病原体をもったマダニに刺されると起こる病気だが、刺されて感染してもペニシリン系統の抗生物質で治るといえる。この病気は世界中で発症しているもので、日本では1989年に北海道で発見され、現在は九州まで全国いたるところで発生している。

刺されないためには山で藪こぎなどをする時は肌をなるべく露出しないようにする。帽子をかぶり、首にタオルを巻いてマダニが侵入してこないようにすることが大切だ。とりわけ獣道を掻き分けて歩く時などは用心したい。防虫スプレーが効果があるので携行したい。また、帰宅後にマダニに刺されていないかどうか入念にチェックする。もし、刺されていたら自分で取らずに病院の皮膚科で切除してもらう。自分で取ると、マダニの一部が皮膚の中に残り、炎症の原因になるからだ。

遭難した、何か食べるものはないか？  
ヤマグリ、ササの若芽などを食べると元気が出る

北八ヶ岳にある白駒荘の主人、辰野廣吉は若い頃に道に迷って空腹で倒れそうになったことがある。ふと見上げると、秋の味覚のヤマグリがあった。生だが食べると、実に甘く、見るみるうちに元気が出て再び山小屋に戻ることが出来たという。それ以来、山の実を調べると、ブナの実も元気になることがわかり登山者にすすめるようになった。ただし、食べ過ぎると下痢をするので要注意だそう。これら以外にはササの若芽がある。ササから出ている若芽をゆつくり抜くと先端に1センチほど白い部分がある。食べると少し青臭いが元気が出るといわれている。夏から秋にかけてはクワ、野イチゴ、ヤマボウシ、エビヅル、マタタビなどの実がある。食べるに甘く元気が出るので覚えておいていざとなったら食べてみよう。

春は山菜も非常食になる。タラノメなどは茹でて食べるとうまいが、ウルシと間違えると大変なことになる。タラノメとヤマウルシは不思議と隣り合って出るものだが、タラノメは茎にトゲがあるのが目印。タラノメ以外にはヨモギ、ワラビ、セリなど食べられる山菜があるが、隣接してクサノオウ、トリカブト、ドクゼリなどの毒草が咲くので間違えないようにしたい。出来れば植物図鑑を常にザックに入れて確認しながら採取するようにしよう。



ササ(左)の若芽を抜くとその先に柔らかい部分がある。それを食べると少し青臭いが、元気が出るといわれている。山の中では野イチゴ(右)がよく見つかる。食べると甘く美味しく元気が出る



ヤマグリは手ではむけないので片方の靴で押さえ、片方の靴でむしると意外と簡単に実を取り出せる。1、2個食べると元気が出るが、食べすぎると下痢をするので注意が必要



ヤマカガシ。赤と黒の斑紋が交互に並び、首の部分が黄色い。かつては毒がないといわれていたが、奥歯と首の部分から吹き出す毒があることがわかった。全長は1m以下である



マムシ。褐色ないし赤褐色で、太くて短い。丸い大きな斑紋が交互に並んでいる。全長は大きくても60cmほど（ヤマカガシの写真と共に提供、関本快哉）

毒へびに噛まれた、どうしたらいいか  
刺激しないでゆっくり後退して逃げる

山を歩いていると、へびに出くわすことはよくある。大抵が登山者の足音に驚いてスルスルと藪の中に逃げて行く後姿だが、時には、道の真ん中で鎌首を上げてこちらの動きに合わせて首をゆっくり動かすへびもいる。その時の気持ちの悪さはないし、いつ飛びかかってくるかわからず、思わず足がすくんでしまう。とはいってもへびの全部が全部毒を持っているわけではないので恐れるにはたりない。無闇に人間から手を出さなければ、へびから襲ってくることはないようだ。しかし、用心するにこしたことはない。日本にいる毒蛇はジャパンスネークセンター（群馬県太田市藪塚町）によると、次の3種類である。

ヤマカガシ 本州、四国、九州に棲息。赤と黒の斑紋が交互に並び、首の部分が黄色い。かつては毒がないといわれていたが、奥歯と首の部分から吹き出す毒があることがわかった。全長は1m以下である。

マムシ 北海道から九州に棲息。褐色ないし赤褐色で、太くて短い。丸い大きな斑紋が交互に並んでいる。全長は大きくても60cmほど。

ハブ 沖縄諸島に棲息。首が細く黄褐色で黒い斑紋が交互に並んでいる。全長は1〜2m。

これらのヘビは、沢、沼、そして水溜りなどの湿ったところや湿った岩穴、木の穴などに棲んでいる。そういったところを歩く時は音を立てて歩くときよいという。ヘビは臆病なので逃げるからだ。また、肌を露出しない服装が好ましい。ヘビは色か温度かは定かではないが、肌を露出していると、肌を餌だと思いがけて噛み付くという。噛まれても少しでも被害を少なくするために長袖、長ズボンの着用は必要だ。

運悪く出くわしたらどうしたらいいか。一般的には、刺激しないようにゆっくり後退するか、もし近い場所にいる場合は、先が二つになった杖で首を押さえるとヘビは動けなくなるといわれている。いたずらに刺激をすると、攻撃してくる。

カメラマンで山岳ガイドの仁井田研一はよくヘビを見かけるといふ。仁井田の対応策はどのようなものだろうか。ヘビは音を立てると逃げるのだろうか。仁井田はこう語る。

「確かに音を立てると逃げるマムシもいた。しかし、中には頑強に逃げも隠れもしないマムシもいた。ヘビにも臆病な奴とそうでない奴がいるようだ。性格があるのかも知れない。そこで実験してみた。逃げないマムシの頭上に帽子で影を作ってやった。すると逃げた。きっと天敵の鳥が来たとも思ったのかも知れない。鳥には勝てないからね」

それもひとつの方法かも知れないが、一般登山者はやはり逃げるのが一番よいだろう。

「くれぐれもヤマカガシを刺激しないようにして欲しい」というのは、吾妻小舎の遠藤守雄。ヤマカガシは大人しいヘビに見えるが、興奮すると、首の部分から毒液を噴射するという。そ

れが目に入ったりすると、失明することもあるというのだ。要注意だ。

もしヘビに噛まれたら、どうなるか。症状は次の通りだ。

マムシ 最初、噛まれた局所を中心に痛みと腫れが広がる。その後、痛みや腫れは減少するようだが、血圧の低下や出血傾向が見られる。

ヤマカガシ 最初は30分～1時間後に一過性の激しい頭痛を伴うこともある。特別な症状はないが、数時間から1日ほど経過して、歯ぐきや傷からの持続性の出血が見られる。

ハブ 咬まれると傷口がはれて痛みが激しくなる。

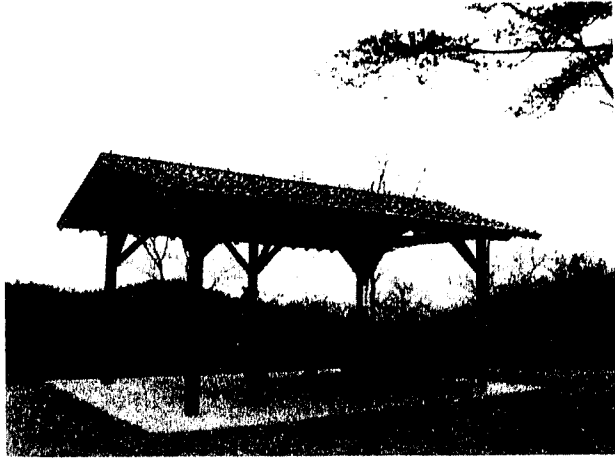
もし、毒ヘビに噛まれたらいたずらに走ったりしないで安静にすることが大切という。それから携帯電話などで「119番」に連絡をする。電話が通じたら、落ち着いて、現在の場所、症状などを話し、指示を仰ぐ。救急車が入れる場所まで来てくれる。落ち着いて下山し、病院で血清を打ってもらおう。マムシが多い地域ではきちんと血清を用意している病院があり、緊急体制で治療してくれる。

よく本などには、「傷口より上の部分をハンカチやバンダナなどで縛り、毒を吸い出す。吸い出したらうがいをする、さらには傷口を氷で冷やすとよい」と書かれているが、専門家によれば、かえって悪影響を及ぼしかねないそうだ。また、気持ちを落ち着けるために酒を飲む人もいるが、かえって毒が早く回るので飲酒は控える。一番よくないのは、咬まれたことでパニック状態になることだ。気持ちを落ち着けて治療してもらおうようにする。

## 雷が鳴った、どうして逃げようか 午後に稜線を歩いていないようにする

もう30年ほど前のことだが、南アルプスの山を歩いて山小屋に到着したのが、午後3時頃だった。自分では早く着いた方だと思ったが、山小屋の主人にいきなり「こんなに遅く着いてお前は死にたいのか!」と怒鳴られたことがあった。いったい何故叱られなければならないのかと思っただが、その直後に激しい雷鳴が轟いたのを聞いて納得がいった。3000メートル級の山では午後になると雷が活発になり、上下左右から雷が走るのである。山小屋に到着するのは午後2時でも早くないといわれ、それ以後は午後2時には着くように肝に銘じた。もし、あの時、山小屋の主人に叱られていなかったら、その後も遅く着き、大変なことになっていたかも知れない。

この例でもわかるように雷に遭遇しないためには午後の早いうちに山小屋に着いているかあるいは稜線など山の高みを歩いていないことである。そのためにも大切なのは山の鉄則である「早立ち、早着き」である。特に日帰りの場合は昼には昼食を終えていて、下山を開始しているくらいがよい。山は午前中が勝負なのである。たまに昼近くから登山を始め夕方に下りる人を見かけるが、雷だけでなく、暗くなってから下山するのはきわめて危険である。特に秋から冬にかけては、夏場に比べると2時間半も日が暮れるのが早い。朝一番の電車やバスに乗って早め早めの



かつて東屋に避難した登山者が落雷に遭い事故になったことがあり、東屋も安心とは限らない。しかし、最近では避雷針付の東屋が登場し、登山者の安全につながっている



雷雨の時は、頂上から山麓へという具合に速やかに高度を下げるが、水は電気を通すために遠くで落雷しても感電する可能性がある。沢の渡渉は控えた方がよい

行動を取るようにすればそれだけ雷に遭うだけでなく危険から回避できることになる。

しかし、雷はいつでもどこで遭うとも限らない。もし、積乱雲が活発な動きを始めるのがわかったり、雷鳴が聞こえたら、遠くであつても登山は中止するのが賢明だ。遠くで鳴っているからといって安心していううちにあつという間に雷雲の下にいたということはよくあることだ。もし、頂上にいたら立ったままではなくて、体を低くしながら尾根に下る。尾根にいたら山腹へと少しずつあわてずに高度を下げるようにする。その時、注意したいのは、高い木や岩の側にはいないことである。最低でも5メートルは離れるようにする。雷は平坦なところより高いところにある高い木や岩など突出したところに落ちやすいためである。東屋も決して楽観視できない。以前、丹沢の中腹にある東屋に大勢の人が逃げ込み、そこに落雷して多数の死傷者を出したことがある。団体の場合はなるべくばらばらに散るほうがよい。

また、逃げる際、金属類を外すことも必要だ。最近では金属を外すよりも姿勢を低くした方が効果があるといわれているが、それでも眼鏡やベルトの金属に落雷した例が過去にあるので、用心するにこしたことはない。なお、金属類は後で回収できるようにビニール袋に入れて草むらなどにおいて置くようにする。

「何故かわからないが、木は木でも見ていると、枯れた木よりも生木の方に落ちる確率が高い。枯れた木にはあまり落ちないようだ」

こういうのは雲取山荘の新井信太郎である。真偽のほどはわからないが、水分が雷を呼び寄せるのだろうか。いずれにしろ突出した木には近づかないことにこしたことはない。それはともかく新井信太郎によれば、雷は雨が降っている最中にはほとんど落ちないが、雨の前後には落雷しやすいので気を付けなければならぬと話す。中でも雨が小降りになり、雷が収束に向かっていると誰もが思った頃に突如、落雷することがあるそうだ。油断をしてはならないのである。

もし、雷が鳴り避難している時、近くに山小屋があつたらすぐ飛び込み、雷が去るのを待つべきである。山小屋ほど安全な場所はないのである。そのためにもコース上にある山小屋や避難小屋の位置は常に地図で調べ頭に入れておくようにしておきたい。知っているのと知らないのとでは大きな違いとなる。間違つても稲妻と雷鳴との間に時間があるからといって歩き出すような乱暴なことはしないようにする。安全のために自分をセーブする努力が必要だ。

しかし、山小屋に逃げ込んだからといって安心してはいけない例もある。以前、町営雲取奥多摩小屋の元小屋番岡部徹がいつていたが、1度雷がストーブの煙突に落ち、ストーブがいきなり火を吹いたことがあるという。山小屋が爆撃を受けたのではないかと思うほど驚いたという。もし、ストーブに触っていたら即死だった、雷が鳴ったらストーブから離れると注意していたものである。

これら以外には、天気予報で雷注意報が出たらその山域に入らないようにする。また、雷が鳴っている時は沢の渡渉は控える。水は通電するため遠くで落雷しても感電しないとも限らないからだ。



道に迷ったと思ったら、下の方、つまり、里に向かって下りない。木の上に上って周囲を見渡してみよう。意外と近くを登山者が歩いていたり、登山道を見つけたりする



道に迷ったと思ったら、まずは岩に座ったり、飴をなめるなどして気持ちを落ち着けることが大切。それから行動する。落ち着かないとパニックに陥るだけである

## 道に迷った、どうしよう

迷わないためにはいろいろあるが、時々振り返るのもひとつの方法

ふと気が付いたら、その先に道がなかったり、どこへ続くかわからない道を歩いたりすることがある。街中でも慌てるのにまして山中でそんな状況になったらパニック状態になりがちだ。不安から心臓の動悸が激しくなり、その状況から逃れるために闇雲に下、つまり里に向かって下りたり、さらに前方に歩き出したりする。よかれと思うが、その行動はさらに深みにはまることになる。中でも里方面に下りるのは崖や滝などがあり危険極まりない。

「道に迷ったと思ったら、すぐに立ち止まり、とにかくしばらく動かないことだ、その場に座るなどして気持ちを落ち着けて、それからのことを考えるのが大切」

こうするのは鍋割山荘の草野延孝。その場で水を飲んだり飴などをなめて気持ちを落ち着けて欲しいという。草野は今まで道に迷った登山者を何人も探しに行ったことがあるが、中でも記憶に新しいのは、数年前のことだ。小屋を閉めて自宅に戻ると、夜10時頃、ある登山者の親から電話がかかってきて息子がまだ帰っていないという。その息子というのは、前日、草野の小屋に泊まった青年で朝、見送ったばかりかその青年は登山者が行かない方面に下りて行ったのでよく覚えていた。その道は一部がれ場になっていて、迷いやすい。草野はそのことを注意して見送つ



たが、どうやらそこで迷ったようだ。

草野は山に戻った。山小屋に着いたのはもう夜中だった。それから草野は懐中電灯を点けながら探すと、青年が岩陰でうずくまっていた。幸い助かったが、冬のため歩いて疲れて寝てしまっていたら疲労凍死は免れなかっただろう。聞くと、やはり、がれ場のため行き先がわからなくなり、行きつ戻りつしているうちに時間が経ち、疲れて朝を待つことにしたという。

この遭難はがれ場で道がわからなくなったということだが、道に迷うというのは、様々なきつかけがある。例えば、雲取山荘の新井信太郎によると、「濃霧の時や雨の時に歩くと道に迷いやすい。中でも濃霧は怖い。目の前にある道標がよく見えないこともある。そのため右に向かう標示はわかるが、直進の標示がわからないことがある。登山者は焦っているためもあり、右に行つてしまいがちだ。十字路をまっすぐに来ればすぐ先にうちの小屋があるというのに」という。これら以外には誰が作ったかわからないが、「右へ行くと近道」という手書きの看板につられ、ついつい歩き出して道に迷ってしまうとか、ふとした拍子に獣道に入り込み迷うなどがあるという。中には山頂に登った後、同じ道を下っているのに違う道だと錯覚し、山頂に戻つて違う道に入り道に迷ったという人もいるという。こんな具合に道に迷うきっかけ、落とし穴はどこにでもある。では道に迷わないためにはどうしたらよいか。登山道の要所要所に立った時、チェックするのはもちろんだが、自宅で事前に調べ頭に地図を入れてシミュレーションしておくことが大切である。分岐点などをよく調べないで来るから迷うことになりがちだ。頭の中に地図がきち

んと整理されないためにA地点で入らなければならぬものをたまたま近くにあったB地点から入るといふようにとんでもない道に入ったりするのである。そうならないためにも地図はよく読んでおくことが大切である。少しでも不安を感じたら、現在地がわかる場所まで戻り、確認する。新井信太郎は登山道を歩いている時、時々振り返ってみたらよいという。歩いている時、前ばかり見ていると、同じ道を戻った時、見たこともない道に入り込んだと思ひ、道に迷ったと錯覚し、パニックになる。実際、振り返ってみると、道の印象が違うことがわかる。試してみるとよい。いざとなると、助けられることもあるだろう。

いずれにしろしてはならないことは不安を感じても「何とかなるさ」と黙殺して、どんどん歩いてしまうことである。その時点でもはや道に迷っているといつてもよい。

道に迷ったらどうするか。とにかく迷ったと思つた時点で立ち止まり、それ以上先に進んだり、下に下りたりしないことが先決である。そして気持ちが落ち着いたら、少しずつ戻る。もし落ち着かないままだったら、道を戻ることのままならない。そして正規のルートだと自信が持てるまで戻り、地図、磁石、高度計などで位置を確認してから再出発する。

霧の時は無理して歩かない。雨具を着込んで安全な場所に避難する。霧はどんなに濃くても1日に3回は晴れるといわれている。それを我慢強く待つとよいそうだ。天気がよければ高い木や大きな岩があったらそれに上がり辺りを見回してみよう。近くに登山道を登山者が歩いているのを発見することもある。



皮がトコロテンのように縦にいくつも裂けたヒノキ。専門家に聞くと、クマが遊んだ跡という。これは都留市の九鬼山の一般登山道横で見かけた

## クマが出た、どうしたらいいか

クマと遭遇したら逃げるしかないが、遭遇しないための方法もある

ここ数年、クマが出没したというニュースが多くなっている。環境省によると、2006年に全国で捕獲されたクマは10月末までで約4300頭、死傷者は約130人（うち5人死亡）にのぼるといふ。ともに過去最多で出没範囲は、山間地だけでなく市街地にも広がっている。中には民家の中に入り冷蔵庫を物色していたクマもいた。これは驚くべき現象であり、数字の高さである。クマの専門家は、木の実の不作という理由もあるが、人間の食べ物の味を覚えて、集落をエサ場と認識したクマが増加しているためと指摘をしているという。

では、山の中ではどれほど目撃されているのか。山小屋の主人に聞くと、「50年間で3回しか見たことがない。1度は沢に水を飲みに行ったら鉢合わせしたが、クマから逃げて行った。後は登山道をあわてて横切るクマを見た。そんな程度だ」（雲取山荘・新井信太郎）

「丹沢にクマがいることは調査をしている人から聞いて知っている。しかし、30年も山を登ったり下りたりしているが、1度もその姿を見たことはない」（鍋割山荘・草野延孝）

という具合に目撃談は意外と少ない。山小屋の関係者ほどよく見かけるのではと思うのだが、どうやら違うようだ。新井信太郎はこういふ。



もし、クマに遭遇し、逃げる時間がない時、試してもらいたいの、雨具などを着て広げ、体を大きく見せる方法だ。そして大声を上げる。すると、クマは自分より大きい物がある、敵わないと感じ逃げるそうだ

「クマは目があまりよくないが、鼻が鋭いから人間のおいを感じると、すぐ逃げるようだ。クマにとって人間は天敵で一番怖い存在だからほとんど逃げない。逃げる時は笹の中を音も立てないで歩くそうだ」

山の中で人がクマに襲われたという話はほとんどが山菜を採るために山奥に入ったことから起きている。クマの棲息地に入るのだから事故は起きやすくなるのである。その一方で登山者が普通に登山道を歩いている時に襲われたという話はまず聞かない。やはり人間を感じると、クマの方からさっさと逃げて行くようだ。しかし、登山道でも特殊なケースでクマに襲われたという話をふたつ聞いたことがあるので紹介しよう。

ひとつは、秋田県のある登山者。クマの出没が怖くて爆竹を鳴らしながら歩いていた。すると、向こうから痩せた犬が走ってきた。見るとそれは犬ではなく、猟師に鉄砲で撃たれて傷を負ったクマだった。その人はクマと格闘した。クマの急所は鼻。その鼻を殴って撃退して命拾いをした。「クマは爆竹の音を鉄砲の音だと思ったのか、俺を猟師だと勘違いして仕返しに来たようだ」とその人がいったが、一歩間違うと大変なことになっていた。

もうひとつは福島県在住のカメラマンで山岳ガイドの仁井田研一の場合である。ある日、仁井田は西吾妻山の若女平の登山道を歩いていた。その日は雨が降っていて、登山者は他に誰もいなかった。音も立てずにすり足でゆっくり歩いていた。すると、5メートルほど先の藪が動いたと思ったらその中からクマが右手を上げながら突然現れた。仁井田の目前をクマの右手が

横切った。仁井田は瞬間的に後ずさり、持っていた三脚でクマを殴りつけた。すると、クマは一目散に逃げた。仁井田は剣道の心得があった。クマの腕が振り下ろされた瞬間後ずさりして難を逃れたので顔面の擦過傷だけで済んだのである。

秋田の登山者の場合は手負いのクマである。手負いグマは三大危険グマのひとつといわれ恐れられている。仕返ししようといきり立っているのである。ちなみに他のふたつは子連れの母グマと秋、発情期を迎えたメスグマである。子連れの母グマは子供を守ろうと神経質になっていて、発情期のメスグマは数頭のオスが回りにいることからかなり興奮して危険なのだという。仁井田の場合は、雨の中ひとり音も立てずに歩いたことが特殊な状況といえよう。風がないので仁井田の臭いがクマに届かなかったようだ。人間が来ないと思つて安心して寝ていたところへ仁井田がいきなり現れたのである。逃げる暇がなくて襲い掛かったようだ。

二人の遭難はあくまでも特殊である。しかし、いくら特殊とはいえ、登山道の近くにクマが潜んでいるということはこれでわかるのではないか。結局はクマが現れるか現れないかの違いなのである。ではクマと遭わないためにはどうしたらいいか。まず危険だと思つたら音を立てて歩くとか鈴を鳴らしたり、ラジオをかけたりますとよいだろう。そうすれば逃げるだろうし、出合い頭でぶつかかることもない。ただし、登山中全行程で鈴やラジオを鳴らしっぱなしにするというのは第三者の迷惑である。他に誰もいず細かい時とか危険地域と思われる場所だけにしたい。もし、不幸にしてクマに遭遇したらどうするか。新井信太郎はこうアドバイスする。

「クマは目が悪いから動く物を追いたがる。だからザックを投げると、それを反射的に追う。その間に逃げるとよい。逃げる時は下ること。クマは登りは得意だが下りは苦手なようだ」  
「雨具などを着て両手を広げて体を大きく見せたり、大声を上げると逃げる。クマは自分より大きいものには恐怖を抱くものだ」

「やってはいけないことは「死んだふり」という。猟師に聞いたことだが、クマは死んだふりをした人間を前足で引つ掻いたり噛んだりして危険だという。逆にクマが死んだふりをするところがあるという。鉄砲で撃たれ、瀕死の状態にあるが、まだ意識がある時である。猟師が油断して近づいた時、やおら立ち上がって襲い掛かる。最後の抵抗である。以前、奥多摩で瀕死のクマを覗いた人がいたが、次の瞬間、顔面を殴られ大怪我をした人がいたとは元町営雲取奥多摩小屋の小屋番岡部徹の話である。猟師はクマが生きているか死んでいるかを確かめるのは手の平を見る。もし、開いていたらそのクマは絶命しているが、握っていたらファイティングポーズ状態にあるので要注意で近づかないという。」

2006年度に出された環境省の「クマ類出没対応マニュアル」(暫定版)では「クマがこちらに気づいていない時は、ゆっくりとクマから見えない方向まで離れる」「クマがこちらに気づいて逃げていく場合は、周囲の状況に気を配りながら逆の方向にゆっくり離れる」「クマが気づいて近づいてくる場合は、クマの動きを十分確認しながら、ゆっくりと後退する」などが紹介されている。